前 文

作家太宰 治は、小説『津軽』の中で弘前を次のように描いています。

あれは春の夕暮れだったと記憶しているが、弘前高等学校の文科生だった私は、ひとりで弘前城を訪れ、お城の廣場の一隅に立って、岩木山を眺望したとき、ふと脚下に、夢の町がひっそり展開しているのに気がつき、ぞっとした事がある。私はそれまで、この弘前城を、弘前のまちのはずれに孤立しているものだとばかり思っていたのだ。けれども、見よ、お城のすぐ下に私のいままで見た事もない古雅な町が、何百年も昔のままの姿で小さい軒を並べ、息をひそめてひっそりとうずくまっていたのだ。ああ、こんなところにも町があった。年少の私は夢を見るような気持で思わず深い溜息をもらしたのである。萬葉集などによく出て来る「隠沼（こもりぬ）」というような感じである。私は、なぜだか、その時、弘前を、津軽を、理解したような気がした。……

この一節は、弘前市の景観の特徴として、山並みや街並みなどのいろいろな要素がつながりを持っていることをよく表しています。そして、この本丸からの岩木山と城下町の眺めは、今も変わらずに、「弘前市民が大切にしたいと思う景観」であり続けています。

岩木山や城下町らしい街並み、また、宵宮や四季のまつりが行われている情景は、市民が日常的に触れることができる景観であるとともに、訪れる多くの人々を引き付けている景観です。これらの景観は、私たちのまわりに当たり前のように存在していますが、景観は時の流れとともに変わります。城下町ならではの趣を醸し出す歴史的建造物や街並みなどには、すでに失われたもの、又は今まさに失われようとしているものもあります。市民アンケートでも、城下町らしさが薄れたことについて多くの指摘が寄せられました。

このまま、景観づくりのルールを設けないままにしておくと、良好な景観を阻害する建築物や屋外広告物などにより、市民に安らぎと潤いをもたらしている景観や魅力的な観光資源としての景観が失われてしまう可能性があります。

一方で、弘前市には明治初頭から多くの外国人教師が招かれ、西洋の文化が流入しました。藩政時代の趣を強く残していた明治・大正期の弘前市に、斬新なデザインの洋館や近代建築が建てられ、今では、弘前市を象徴する街並みの一つとなっています。このことは、新しくハイカラなものをいち早く取り入れる弘前市民の「進取の気質」を物語っています。

市では、先人から受け継いできたものをより良い状態で将来に引き継いでいくとともに、

「進取の気質」をもって弘前ならではの景観を新たに創りだし、市民が愛着を感じ、訪れる人々も満足できる「住んでみたい、訪れてみたい」の景観づくりを目指します。

　また、より良い景観は、「人の営み」（そこに住む人や働く人がいること）が存在して成り立つものであることから、行政はもとより、市民や事業者が景観づくりへの思いを共有することが大切です。したがって、本計画は、市民や事業者、行政が協働して、弘前ならではの景観をはぐくんでいくための指針となるものです。